



ニッポン ドクター和の 臨終図巻

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウィルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。

僕の名前を、コロナ禍の報道で初めて知ったという人も多いようですが、もともと終末期や在宅医療に関する書籍の出版や講演会活動をしてきました。公益財団法人・日本尊厳死協会の副理事長も拝命しています。当会の顧問には元トヨタ自動車社長の奥田碩氏や脚本家の倉本聰氏、小泉純一郎元首相、ソプラノ歌手の鮫島有美子氏、ジャーナリストの吉永みち子氏など錚々(そうそう)たる御仁がお名前を連ねています。この方も、そのお一人でした。

歴代政権の財界ブレイクとして、多くの経済改革をされた実業家、ウシオ電機創業者の牛尾治朗さんが6月13日に亡くなりました。享年92。死因は誤嚥性肺炎との発表です。闘病をされていたという話は聞いておりませんので天寿を全うされたことお察しします。

314 ウシオ電機創業者 牛尾治朗



牛尾さんは兵庫真姫路市出身。20代の頃に父親が倒れ、赤字に喘いでいた家業を継いだことがウシオ電機の始まりです。高度成長期の波に乗りたった一代で東京丸の内本社を構える大企業に育て、経済界の重鎮となりました。

そんな牛尾さんが、ご夫婦で日本尊厳死協会の会員になられたの

は1996年、65歳のときです。なぜ入会したのか理由を尋ねたところ、当時協会の資料に載せていた「死を決めるのは自分であって医者ではない」という言葉が気に入ったのだと仰っていました。

ご夫婦が互いの尊厳死協会会員証を持ち歩き、どちらかに何かあったとき「延命治療は断ろう」と話し合っていたそうです。

その奥さまが81歳のとき心臓発作で自宅で倒れ、会社にいた牛尾さんに救急隊員から連絡が入りました。蘇生(そせい)の可能性が低いと悟った牛尾さんは心肺蘇生処置を断ったそうです。隊員が

「奥さまは生前、何か(終末期医療の希望を)仰っていましたか」と尋ね、「僕ら夫婦は尊厳死協会の会員です」と答えると、「それなら結構です」と理解を示してくれました。そのおかげで、運ばれた病院で、家族10人で穏やかに看取ることができましたよ、と笑顔でお話されていました。

僕はこのお話を聞いて、牛尾さんの人間力に感動しました。突然救急隊員から電話があり、奥さんが心肺停止と言われたら、冷静さを失い狼狽(ろうばい)するのが夫というもの。蘇生の可能性は限りなく低いとわかっていても「1秒でも長く生かして」と懇願する人が大半です。しかし牛尾さんは迷うことなく、本人の希望を優先させたのです。

『わが人生に刻む30の言葉』(致知出版社)という、著書の中では、「こんなことを書いています。」「みんなが自分の生き方を選べる社会が一番素晴らしい」「生き方も終わり方も自分で選べる社会へ。それが成熟した国の在り方ではないでしょうか。」

妻の「尊厳死」優先した人間力